

新任教員紹介



社会学科特任教授

平塚 千尋

もう三〇年余りも前の十一月末、南紀沿岸を取材していて地震津波流言に遭遇したことがある。十二月一日午前零時半、大地震が発生し大津波が襲来するという流言だった。町では人々が防災用品を買いに走り、浜では高い場所に仮小屋を建てて荷物を運び上げるなど、ちょっとした騒動になっていた。メディアと時代が作り上げた流言騒動だった。

この出来事だけではない。日本で最初のケーブルテレビ自主放送局・郡上八幡テレビの解散、鳥羽・答志島に残る若衆宿の生活と習慣、増え続ける交通事故への対策や消費税の導入をめぐりアンケートを交えて行った多元徹底生討論番組——私の調査・研究はそのほとんどがこうした現場時代の取材や番組制作経験を下にテーマを設

定し、新たに調査・検証して解き明かしたものである。従って初めに研究の全体的な俯瞰図や論理的な構想があったわけではない。具体的な社会事象、事実から出発し、観察・分析を進めることによってフレームができていった。

学問と言うより雑学に近いのだが、その行き着いたところ、それをあえて専門領域と言うなら、「災害情報とメディア」、「地域社会とメディア」、「市民とメディア」、この三つの視点を切り口にした『メディア社会論』、そしてその重なるところが私の中心テーマである。マスコミや、ジャーナリズムのマスを対象とした視点からの情報伝達ばかりでなく、コミュニティに立脚した生活者・市民の目線に立った情報伝達、コミュニケーション論、メディア社会論ということになるのか。

大学で社会学を学び、当時盛んだった日本文化論、近代化論などの影響の下、「文化の個別性と普遍性／日本の歴史は明治維新を境に西洋文明に接木されるのか」と題した卒論を書いた。その答を求めるには現実の社会を現場で見るほかないと、放送局に就職して報道番組の

制作現場を選び、二五年余りをそこで過ごした。体力的限界、家庭の事情、それにメディアのあり方への若干の疑問もあって現場を離れ、放送教育開発センターさらには放送文化研究所へと移ったが、研究は現場で経験したネタ、今日につながる社会事象を、空間的にも時間的にも離れた視点から、再度客観的に調査・分析するケースが多かった。それはマスコミ、ジャーナリズムの世界を通じて自らが体験した日本社会の現代史、その近代化、西洋化、グローバル化、都市化、高度成長と成熟の意味を確認する作業でもあったように思う。

デジタル技術の急激な進展によりもたらされるメディア環境の変化は、生活様式や文化の形、社会の構造をも大きく変えようとしている。まさにメディアが歴史の流れを一層加速し、今までにない未踏の世界を現出させようとしており、各個人にメディアへの主体的なかかわりを要請している。

学生や若い人たちの場合は新しいメディア機器への接触は早く、利用も盛んで、メディア環境への適応は早い

が、高度情報化の社会的・歴史的意味になると必ずしも自覚的ではないように見える。一方、もう若くもない私にとっては、正直、最新技術にはついていけないところも多かつらい点もあるが、現代史や現代社会の諸事象に必ずしも強い興味や関心を抱かない、しかし新しい時代を自ら切り拓き生きていかなければならない学生諸君と、残された立正大学での四年間をとくに補い合いながら、激変期のメディアを通して転換期の社会を探っていきたいと考えている。